

書評に答えて

磯部 卓三 ・ 栗原 理

まず、本書を取り上げていただいた市大社会学編集委員会と書評をしてくださった谷口重徳さんに感謝いたします。

評者による、3点に分けての本書のまとめ方はわかりやすく、要約が巧みで説得されました。もっとも本書は、特定の教育者を取り上げたものですので、3点のうちの第1の点は、視野にいれたという程度のことで終わっています。しかし、この度の研究を通して、広島における私学教育の果たしてきた役割をしっかりと理解する必要性を感じました。そのための研究は、まずは地方教育史の課題でしょうが、同時にこの地で活躍した特定の教育者の研究が積み重ねられることで深まると思います。本書がそのような研究のひとつとなれば幸いです。

鶴の学校の大きな特徴は、何よりも生徒の成長を願い、自由と自発性を重んじる教育を実践したこと、鶴が全人格で生徒たちと接し、そこに教え子の言葉どおり「精神のコミュニティ」が形成された点であったことだと思います。生徒を生き生きとさせたこのような鶴の教育実践は、私学という条件を最大限に生かしたもののようと思われます。付け加えるなら鶴が塾教師であり塾主であったことにも注目すべきだと、改めて思うようになりました。塾から私立学校への移行は、時代的条件のなかで形式を整えただけともいえそうです。私学教育の独自の意義を改めて考える必要を感じました（今の「教育無償化」に関する議論には私学教育論が欠けているように思います）。

評者が取り上げてくださったテーマは、どれも私たちに再考を促すものです。紙面の都合上1点だけに絞ります。鶴の現実主義です。鶴の周りには、授業を理解しない、あるいは悪行をやめない生徒、無理解な同僚、自分を批判し、排斥しようとする人々がおり、また自分自身にも思い通りにいかないところがあったでしょう（第一次的現実）。生徒に「勉強しなさい」「悪いことをしないように」とうことは簡単ですが、それで生徒が変わることは少ないでしょう。大人を相手に「お前の考えは間違っている」ということで、その人の意見を変えることも難しいでしょう（二次的現実）。その場合、一般に生じるのは怒りです。「どうして分からないのだ」と声だけが高くなりがちです。しかし、大声上げることで現実が変わることはあまりありません。鶴は、怒る代わりに悲しみました。それは、起きた不都合を現実と

して受け入れる痛みの涙でした。その現実には自分自身が関与している、一役買っていると鶴は考えたからです。鶴は涙を流しました。しかし、自分に責任がある以上、涙で終わるわけにはいきません。愛するものへの責任を果たそうとしました。その責任はすぐに果たせるようなものではありません。鶴は「こつこつもくもく」働いたのです。

鶴が過分と思われる責任を果たそうとしたのは、愛のゆえです。現実を受け入れたうえで、それをよい方向に変えるためには何でもするというのが鶴の態度でした。鶴にとっては、それは幸せなことだったのに違いありません。生徒たちがいきいきとしたのは、そうした鶴の愛と真剣さにふれたからだと思います。

ここではいちいち取り上げることはできませんが、ほかにも再考を促された点がたくさんありました。

評伝的なものを書くのは私たちにとってはじめてで、大きな不安がありました。しかし、資料収集を進めるなかで、私たちはただ鶴を中心とするネットワークに繋がればよいと思うようになりました。鶴虎太郎の教え子たち、お孫さんたちをはじめ鶴と繋がった方々と繋がれば、鶴についての情報が流れてくるので、それをまとめればよいと思うようになりました。鶴を中心とするネットワークは、私たち2人を出会わせたものですし、最終的にはこの本もこのネットワークが生み出したものといえましょう。この本を書くなかで、私たちは鶴虎太郎先生から多くのことを教えていただきました。今後本書が鶴に繋がるネットワークの端末にあつて、鶴の遺産が今を生きる人々に受けつがれていくためのつなぎ役をいくらかでも果てせれば幸せです。